

も多く、全蛇毒タンパクの $\frac{1}{4}$ を占めるピーク4を更に Sephadex G-50 を通して sucrose や ampholine carrier 等を除去すると2つの major peak がえられるが、void volume より遅れて出る溶出ピークを principal toxin とし、CNBr-Sepharose 4B にカップリングさせた。

このようにして調製したリガンドを用いて神経細胞を結合させ、グリアを濾別し更に神経細胞を遊離濾別採取した標品について形態学および細胞の化学的特性について検討を行なった。

3. 蛍光抗体法による虫垂炎における免疫グロブリン動態についての研究

(中検病理) ○平山 章・瀬木 和子
(外科) 杉村 忠彦・織畑 秀夫

虫垂は消化管中でもつともリンパ小節の多い組織であるにもかかわらずその免疫学的役割についてはほとんどわかっていない。そこで臨床的に虫垂炎と診断され虫垂切除を行なった虫垂96例を組織学的にカタル性、化膿性、慢性虫垂炎に分類し、同時に IgA, IgG, IgM, IgE に対する蛍光抗体直接法を行なってこれらの炎症に際して虫垂内の免疫グロブリン含有細胞がどのように変化するかを観察した。

虫垂炎の場合はいずれの時期でも対照例に比べて腺上皮内の分泌性免疫グロブリンは変動するが、それに伴って粘膜固有層、リンパ小節内の免疫グロブリン含有細胞の増減がおこる。この場合分泌性 IgA は減少するがリンパ小節、粘膜固有層内 IgA は軽い増加を示す程度である。IgG は分泌性 IgG は認められず虫垂炎の場合は粘膜固有層、リンパ小節内共 IgG 含有細胞は減少した。IgM は分泌性 IgM の変化につれて比較的早くリンパ小節、粘膜固有層内の IgM 含有細胞が腺上皮側に移動して行くような所見を示した。また、IgE も同様の傾向を示すがその程度はやや軽く、殊にリンパ小節内 IgE 含有細胞の増減は軽かつた。

4. Post-pregnancy osteoporosis の1例

(整形外科)

○林 美代子・矢尾板孝子・白須 敏夫

1955年 Nordin および Roper はそれまで idiopathic osteoporosis と分類されていたものの中に、産後におこつたものが含まれていることに気が付き、これを post-pregnancy osteoporosis という概念に分離独立させた。一般に本症は希な疾患とされ、本邦では1962年広谷の報告以来13例をかぞえるのみである。われわれは本症を経験したので、文献的考察を加えてここに報告する。

症例は31歳主婦、昭和48年8月1日帝王切開にて分娩。その直前より腰痛出現し、産院退院後も増強していたため、当科に受診し、9月25日入院した。入院時、第2腰椎部にて軽度の角状突背を呈し、この部を中心として脊椎の不橈性が著明であつた。骨X線像は骨陰影が淡く、osteoporosis の所見を呈し、第2腰椎には圧迫骨折が認められた。入院後、【ギブスベッドにて安静を保ち、Ca 剤を投与したところ、腰痛は漸次軽減した。ところが、骨X線像では osteoporosis がさらに進行し、第4腰椎は魚椎変形を呈した。11月24日腰痛消失したので硬性コルセットを装着して退院した。退院後、身長短縮は停止し、骨X線検査・骨塩量、中手骨指数など改善傾向を示している。一般に osteoporosis は女性において閉経期を境として急速に進行することが知られているが、この男女差は estrogen の欠落にもとづくものと推測されている。妊娠時血中 estrogen は非妊時よりはるかに高いレベルとなり、分娩を境として急速に低下し、さらに産褥より数カ月にわたつて非妊時より低値を示し、次第に増加してもとにもどる。この事実と対応して、老人性 osteoporosis と異なり、その進行は停止、ないし回復することが知られている。したがって妊娠分娩後におこる本症も、老人のものと同様 estrogen の変動が主要因となつておこるのではないかと考えられる。

5. メニエール病患者の予後調査

(耳鼻咽喉科) ○藤多 恒子・上村 卓也・金子 寿子・杉山 順子

メニエール病の予後を知る目的から昭和46年1月から昭和49年12月の4年間に当科を初診したメニエール病患者74名にアンケート調査を行つたので、その結果について報告した。

メニエール病の診断は厚生省研究班の診断基準、すなわち、1) 回転性めまい発作を反復すること、2) 耳鳴、難聴などの蝸牛症状が反復、消長すること、3) 1)、2)の症候群を来たす中枢神経疾患ならびに原因既知のめまい、難聴を主訴とする疾患が除外できる、という3つの条件をみたすことによつて行なつた。

アンケートの結果、回答を得たもの60例、回答なし5例、宛先不明でアンケートが返送されてきたもの9例で、回収率は $60/65=92.3\%$ であつた。

回答を得た60例中、受診しなくなつた後はめまい発作はおこらなかつたもの20例、受診しなくなつた後もある期間はめまいはおこつたが、最近はおこらないもの14例で、これらを加えた34例(56.7%)はめまいの治癒